

事業概要書

事業名	気仙沼市内仮設住宅での孤立化防止と自立支援のための地域コミュニティ形成事業				
開始日	2011年10月1日	終了日	2011年12月31日	日数	90日
団体名	一般社団法人 気仙沼復興協会 (KRA)				
(カウンターパート)					
スタッフ人数	全体 74 人 (福祉部 10 人+新規雇用 4 人)				

CF 事業費総額(税込)	3,370,000 円
--------------	-------------

事業目的	<p>東日本大震災から半年が経過し、被災各市町村では仮設住居への入居が進んでいる。仮設住宅への入居は必ずしも集落単位ではなく、世帯・個人単位の抽選によって決まり、個々の入居者は一から新たなコミュニティや人間関係を築く必要性に迫られている。気仙沼復興協会 (KRA) 福祉部、及びその活動支援を行う SEEDS ASIA (本部：神戸) は、この問題に際し住民の孤立化を防ぎ、また自立を促進する地域コミュニティ作りを目的として、気仙沼市の各仮設住宅を訪問しお茶会の開催や入居者自身が企画したイベントの補助を行い、被災体験と将来の希望の共有を通じた被災者間の絆の再生と新たな地域コミュニティづくりを支援することで、気仙沼地域の一日も早い復興を目指す。</p>
事業全体の概要	<p>●気仙沼復興協会 (KRA) とは 気仙沼市から緊急雇用創出事業として事業委託を受け、現在約 80 名の被災者をスタッフとして抱える気仙沼市で一番の規模を誇る非営利組織であり、現在の事業内容は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 瓦礫の仕分け・片付け・高齢社宅の片付け支援 2. 避難所における子供の一時預かりや高齢者の見守り 3. 避難所や被災地域の治安維持のためのパトロール 4. 被災地域の環境美化・その他 5. 震災被害写真の洗浄と修復・アーカイブ化 6. 仮設住宅の見守りとコミュニティ作り支援 7. 仮設住宅住民の孤立化防止・自立化支援 <p>●対象事業 仮設住宅の見守りとコミュニティ作り支援および仮設住宅住民の孤立防止・自立支援とし、当該団体の福祉部 11 人 (8 月末時点) が実施する。これまで、二班が午前・午後の二回仮設住宅を訪問する形で、7 月度では 23 回 (約 20 箇所) のお茶会を開催した。</p> <p>●取り組むべき課題 (訪問頻度を上げて、きめ細かい対応を行う体制づくりの必要性)</p>

気仙沼市内の仮設住宅は当初予想の 20~30 ヶ所を大きく超える 80 ヶ所に達し、現在の二班午前・午後体制では、住民の孤立化防止のために必要な頻度で、各仮設住宅を回ることが困難な状況に陥っている。そのため、気仙沼復興協会は、少なくとも三~四班午前・午後体制をとることで、現状の一仮設住宅地当たり月 1 回の頻度を、10 日から 2 週間に 1 回ほど訪問し、きめ細かい対応を目指している。

具体的には、スタッフの増員と現在行っているお茶会の継続や入居者自身が企画するイベントの拡充、より効果的な地域コミュニティ作りを行うための事業策定を行う。

●独自のアプローチ

まず 50 ヶ所に及ぶ広範囲をカバーすることによって初めて把握できる仮設住宅の問題点とその対処法の検討が挙げられる。例えば、一カ所に深く長期的にコミットすることも一つの手法であろうが、様々な仮設住宅を訪問し比較することにより、集会場や談話用ベンチのない地区では自治組織の形成が遅れる傾向がある、等の発見もある。次に、新規雇用 4 名に対する育成プログラムとして、大震災後の仮設住宅の孤独死や自殺の問題に対処した経験を持つアドバイザーを神戸から招聘し研修の機会を設けるなど、ノウハウの継承を行う。

●期待する効果

事業終了時には、各仮設住宅が自主的にお茶会やイベントを運営できるようになっていることを目指し、また、これらの活動を通して生まれた仮設住宅のリーダーを当該団体で雇用するなど、本事業が次世代の気仙沼を担っていけるような人材を育てる一助となることを目指している。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)

裨益者 (誰が、何人)

① 仮設住宅の見回り

お茶会や入居者自身が企画したイベントにおいて、自らも被災者である気仙沼復興協会スタッフが、仮設住宅住民の相談や要望、被災体験を聞き出すことにより、信頼関係を築きながら仮設住宅の居住者間のつなぎ役となり、住民の孤立化を防止する。また、仮設住宅住民との対話の中で、行政支援の情報や、他地区の復旧・復興に関する情報、その他仮設住宅住民の生活に有益な情報などを提供することで、住民の復興に関する意識を高め、自立につなげる。特に、仮設住宅住民への訪問回数を増やすことで、住民の生活習慣の変化に注視し、既往災害でも被災者の自立を遅延させる原因となっているアルコールやギャンブル依存等を未然に防止する手助けを行う。尚、お茶会の実施に当たっては、被災地域からより遠く離れて交通の便が悪く情報が届きにくい郊外の仮設住宅建設地や、独居高齢者が多く入居する地区での開催頻度は多めにする等、より効果的な仮設住宅住民の支援を模索する。

気仙沼市内の仮設住宅
約 50 ヶ所の仮設住宅
民 1,500 人

② コミュニティペーパーの配布

お茶会や入居者自身が発案したイベントなどの企画・準備・運営を通じて、地域コミュニティづくりの支援活動を行う中で、特に規模が小さな仮設住宅団地では、お茶会等に既存の行政区（仮設住宅周辺）の住民も招き入れ、「仮設住宅」が時限的にでも地域の一部であるという相互認識を抱くことで、それぞれの繋がりができるよう図る。行政からの被災者への情報を租借し伝達、その他それぞれの仮設住宅のニーズに応じた情報を記載したコミュニティペーパーを作成して配布する。コミュニティペーパーに、地域活動の重要性や他の仮設住宅での活動紹介を交えることで、仮設住宅団地でのコミュニティづくりを促していく。

同上